

経済学概論 A (社会科学解説) 2005年7月28日

指導教授：島岡 光一

助手：中山 利子

助手：李 東源

『ベニスの商人』公演へのコメント

- ☆ 4年次 (f) : 「みんな成績のためというより、良いものを完成させようと頑張っていて、経済学的にも、物には『価値』があったと思います」「ただユダヤ人は悪いやつ、キリスト教は良い人という解釈ではなく、どうしてそうにまで至ったかをもっと掘り下げて考え、知っていくべきだと思いました」
- ☆ 1年次 (m) 「僕も、一生の内にできるかできないかの経験をすることができました。少し自分自身は、成長させてもらったように思います」(自分が成長したという記述が他にも)
- ☆ 3年次 (f) 「解釈の部分では、裁判に勝った方ではなく、あえて負けた方の立場から、このヴェニスの商人を理解しようとしていたのは視点が変わっていておもしろいなど感じました」(「シャイロックが可哀相すぎる」とい意見が多数)「(過去の三つの芝居も面白かったが) みんなで一つのものを作るという、めずらしい体験を出来て、本当に良い経験になったと思います。人前に出ることもちょっと好きになりました」
- ☆ 1年次 (f) : 「先生の授業では経済を受動的ではなく能動的にうけてとても楽しかった。・・・劇から経済を学ぶという新しい感覚私はとても好きです」
- ☆ 1年次 (f) : 「最終的な結論の『社会の改正→人の幸せ』というのは、私は逆じゃないかと思いました。社会を作っているパーツが私達なわけで、民を救うことが先行すべきだと思います。先生のおっしゃる『済経』を支持したいです」(この他に「済経学」を支持するが1人)
- ☆ 1年次 (f) : 「今日で最後の芝居授業になりますが、気持ち的にはまだまだ受けています。楽しく、勉強ができたし、大学生活のいい思い出もいっぱい作ったと思います。これからも、楽しい勉強法を自分でみつけ、勉強にはげみたいと思います・・・大学卒業後、私も、先生のようにユニークな授業を取り込める教師になりたいです」(留学生。日本語は完璧。ところで、将来実習などでもこのような試みをやってみたいと思っている人が数人いた。ここで、みなさんに島岡から申し上げたい。ぼくは、この前期授業の全時間、『教員』役を演技し続けてきたのです。芝居を授業に取り込むかどうかは小手先のことで、ぼくの『教員』芝居はどうだったでしょうか?—島岡)
- ☆ 1年次 (m) : 「本番前日、島岡先生が練習に来て下さり、その時に『当時の中世の雰囲気を出したら? 当時はみんな演じる人は男の人だったから、ポーシャ役は(男の)「子ども」がやっていたんだよ。子どもの雰囲気強調してみたら?』とアドバイスを受けました。そうだったのか! という驚きとともに、今まで『裁判のシーンは男に変装しているんだから素のままでもいいや!』と思っていた自分に改めて考えさせられました。また『他の人がしゃべっている時は、自分は関係ないんじゃない、その人を生か

してあげる』といアドバイスも聞き、本番前日だったけど、そのことだけ意識しながらやってみました。本番ではやはり緊張しました。でも周りの人がしゃべってる時は、それにうなずくなり、驚いてみるなり、挑戦できました。女の人の仕草はとて難しく、見ている人に伝わったか心配です……。でも終えてみてすごく良かったです！・略・この経験はとて貴重でした。また何かしらの劇もやってみたいと思えました。このような経験の場をくださりありがとうございました。」(再度、劇をやりたいという人多数)

☆ 島岡から—今回のコメントは過去4回の芝居を振り返るものが多く、また、1人2人の例外を除いて率直な感動を語られていて、すがすがしいものばかりだった。

ところで、『ベニスの商人』の経済学的考察は、ぼくが講義で言及しなかったので無理もないが、経済学者(済経学者)のぼくから見て見当違いなものだった。

近代資本(合理性と機知に富んだ活動的な資本)の前には、古いタイプの資本があった。一つは「高利貸し資本」であって、これは古代ギリシャから見られる。またもう一つは、「商人資本」であって、「安く買って高く売る」という不等価交換を前提にしたこれもギリシャ時代からあった資本で、しばしば暴力でもって買ったとか、海賊のように略奪を含む「資本」だった。これは「遠洋航海商人」と呼ばれていた。歴史は、この「近代資本」が過去の吸血鬼のような「高利貸し資本」と略奪的な「商人資本」を自らに取り込んで、吸収して近代資本に変えていく。つまり「近代資本」はやがては産業資本(のちに産業革命を遂行する)へ、「高利貸し資本」は金融資本へ、そして「商人資本」は「商業資本」へと「近代化」三分化していくわけだ。

ポーシャは「近代資本」を人格にしたもの、シャイロックは「高利貸し資本」を人格にしたもの、そしてアントーニオは「商人資本」の人格化と考えると、ポーシャのもとにシャイロックの財産が吸収される。アントーニオの財産は海の藻屑となったということだが、実は沈んでいなかったなどと言うのはポーシャ側だけであって、あれはポーシャがアントーニオを救ってやって、ウソをついたのだ。英語ではポーシャがアントーニオに全財産を信託投資すると書いてある。つまりアントーニオはポーシャの番頭になったということだ。すべての古い姿の財産が近代的で合理的な機知に富んだ活動的なポーシャのもとに吸収されてしまったのが、大団円だ。

じっさいに、ポーシャが「箱選び」の結果、父の遺言から解放されて、バツサーニオに向かって叫ぶ。「バツサーニオさま。わたしはあなたのために、今の60倍もの立派な女(才)に、1千倍も美しい女(色)に、そしてまた1万倍もの金持ち(財)になりたいものでございます」と。この才色財の三兼備の女が、最後の財産だけは最高倍率の一万倍にするというまさに近代的資本の宣言ではないだろうか？

バツサーニオの手には、ポーシャからもらったあの指輪(Oの形は女陰を表現する)が一個残っただけだ。

したがって、少なくともこういうことが言える。この芝居の主題は、宗教対立でもなければ、人種対立でもないということだ。

ちなみにこの『ベニスの商人』が作られた二年前の1594年に、ポルトガル系ユダ

ヤ人のロダリーゴ・ロペスがエリザベス一世の最高ご典医にまで出世していたのだが、これをねたんだ某伯爵が、ロペスが女王を毒殺しようと企てているという噂を広め、逮捕して、これを処刑してしまった。その残虐非道な処刑（首をはねて、手足を馬に引っ張らせて八つ裂きにして、その上、お腹の臓物を引っ張り出してロンドンの広場にまき散らした）をシェイクスピアは見て知っているはず。またこれは当時から冤罪であると思われていた。そこでポーシャがシャイロックに「慈悲」を説く振りをして、シャイロックの後ろにいる、観客に切々と「慈悲」こそがキリスト教の精神だと説いて聞かせたのだ。そのポーシャの言葉は美しく心を打つ。シェイクスピアは決してユダヤ人に偏見を持っていなかったと信じたい。

最後に、ぼくから、本講義を受講して参加してくれたすべての学生とティーチング・アシスタントをしてくれた院生にぼくから、最高の敬意と感謝の意を捧げたい。